

研究・調査報告書

報告書番号	担当
229	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)	
Comparison of assessment methods for self-reported alcohol consumption in health interview surveys. 健康に関するインタビュー調査における自己申告飲酒量に対する評価方法の比較	
執筆者	
Ekholm O, Strandberg-Larsen K, Christensen K, Gronbaek M.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Eur J Clin Nutr. 2008 Feb;62(2):286-91.	
キーワード	
飲酒、データ収集、インタビュー、質問、健康調査	
要 旨	
<p>目的： 飲酒量を評価するための簡便な方法を選択することと、言及する期間や回答内容が違うときにどのように自己申告による過剰飲酒の頻度が影響するかを比較すること。</p> <p>デザイン： 4種類の無作為抽出した1000人の成人デンマーク人。データは回答者の自宅で個人的インタビューを通して収集した。</p> <p>セッティング： デンマーク、全国規模</p> <p>方法： 4標本集団の評価方法は(1)7日間思い出しによる調査、(2)典型的一週間でのそれぞれ一日の摂取量、(3)最後の週末の飲酒量、(4)典型的一週間の飲酒量、の調査である。さらに過剰飲酒はそれぞれ違った言及期間と回答形式を使うことで評価された。</p> <p>所見： 性および年齢を調整した平均の飲酒量は、7日間思い出し法で10.6ドリンク、典型的一週間でのそれぞれ一日の摂取量調査で10.4ドリンク、そして典型的一週間の平均飲酒量調査で8.7ドリンクであった。さらにそれぞれ一日の典型的な飲酒パターンを回答した内容は思い出し法のものと同様であった。非公開に質問を受けた回答者は公開して受けて者に比べ過剰飲酒が多かった。</p> <p>結論： 一週間のそれぞれ一日の典型的飲酒パターンについての質問は疫学研究に有用であった。さらに言及期間が長い場合は過剰飲酒を調査するに当たり、公開より非公開による質問がより適切である。</p>	

1ドリンク=アルコール12g